4—4

2

夜帰り

丁度男の帰りたがるころと俥屋がやって来た。

俥屋からすると、私の帰らうとする所が柏の俥屋であった。

一つ手前の俥屋で降りて俥を降りると直ぐ雨気のつくことが、少し来ると、雨がぽつぽつ降り出あらう、歩調を通りやすと、陸橋を渡って、昭和に入って後は初めて雨がつい降りなのである。

雨がついた頃、私の

乗って来たり車はちゃんと待っていました。

汽の煙の如く車まで五十分ばかりある。そこからわづか村まで一里の道だ。薄暗い男衆の少きな停車場でぼんやりと十一時頃待つてゐるようは、いつて歩いてゐれば掉屋の家を捜して怪らしとする者とうとう全くいよ〳〵来ようなった。掉屋の家を捜すことを知つて

~~ようなった。~~

~~掉屋を行くと馬鹿はまた~~

~~あたかも、正道を~~

~~まつて~~

~~行くと、二日目に来ない~~

~~七時頃生、道はあらず~~

~~方向まつて~~

~~世に恐ひ事は~~

~~こゝから~~

[illegible]て我孫子まで行く道は
なかなか面白く、線路
[illegible]
[illegible]て行けば行けませと
いう。
[illegible]暗くなって見
えない。線路
[illegible]切靴が[illegible]
[illegible]
線路を歩けと教へられたので
[illegible]
[illegible]
[illegible]

1歩歩きまくいい。~~[illegible]~~これから見ると、なるほど宇宙の道はいと初めて思い知る。その上街燈の一つないから、如何なる暗い夜でも慣れて来た目は全く暗いとこんな暗い道でも平気でたどりつけるものだと思った。遠くの田舎家はちょうど（ランプ）と油燈の火影が見えて、うれしかった。

此づけばどの家も風呂を立てて、音頭唄はつかって居る。お杉も唄の文句をしてゐる。

中から

中を下り揺さへ一番杉が、今晩は唄上りの浴衣がけで表面の涼しさのみ飾んでゐるものとこころと、いまゝのうた。

年頃陽ぐりの岸のゆるまるなった田圃道、出た、

すのいくとかなる庭が成文はてある。陽のてばま

び桜んぼくらのがある。ふなしない、陽ぐ一つてるふんだ

ゆらしい音を出て文て時自動車が陽からかめ

けふ。

[illegible]

自動車

[illegible]

ゆるので新せとくれるこれ化ない。自轉車が前から後

ゆ

村と出てみると下仏田畑田になる、田畑尽きて丘を上仏又村

車らしい。

ぐ自轉車

ぐうたら又来る。どうも

ぐ

ぐ

ぐ

まなる。義父は、ことをしるンだ、姉娘は

[illegible]と、村を出る時分

ちょうど、田植時分の晩方だった。私が暗いうだから、高い

ばかりの晩方

が立つ。

いつか村から東京の方へ出ると、ぽうっと光が射さ

ねばならぬが、

一度近くの田の夜道を歩いてゐるうちに、向うから行手にぽうっと光の射さ

ってゐるのと、ちょうど見えて来た。作東地の燈光だ。そのうち

村の入口の踏切、開くと、踏切が一ぱいとなる。作東地から

列車：上りか下りの臨時切符番号[illegible]なる筈なれば

いの女の声で[illegible]、上りますと答へた。下りはまだかと問

7

ゾらもう間もなく見えるでせうといふ。さういひながら、分厚な下りの信濃毛布を忘れたぐらいと思ったが、しまつたと思ったが、如何ともすべくなかった。

停車場前の大通り、おさしかつた列車の行方の方角で、下女列車の行方の方角であつた。前の駅で待つてゐたのであつた。どちらが早かつたかと歩いたのとが一所になつたのである。どちらが早かつたかは今と分らぬ。宅へ帰りて待ち兼ねる程の事にて、もう二ヶ月ばかりを経たる。

停車場一つ向こうなるが故に、信州なるものなれば、

我孫子にて